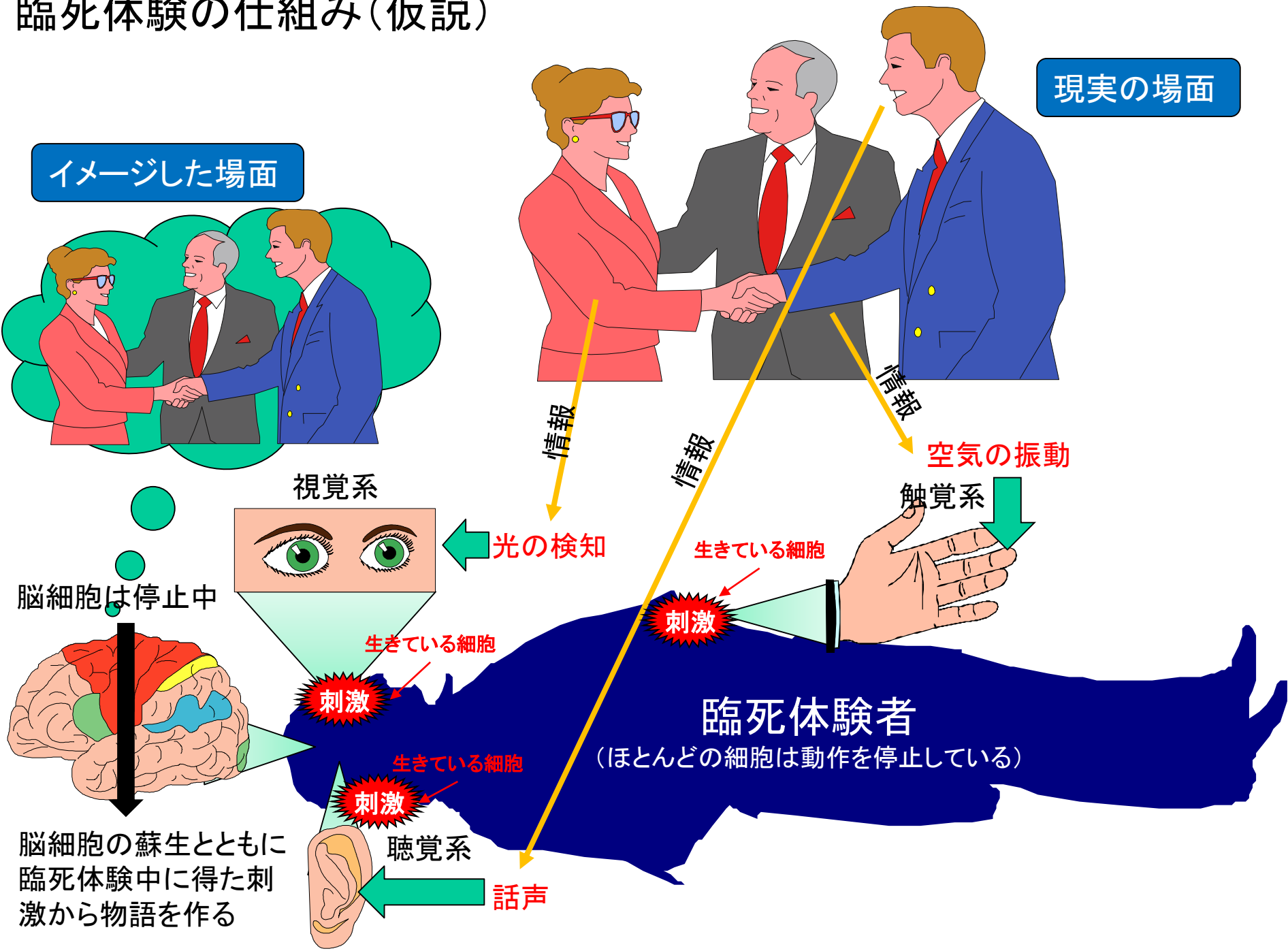


臨死体験の仕組み(仮説)



臨死体験の仕組み(解説)

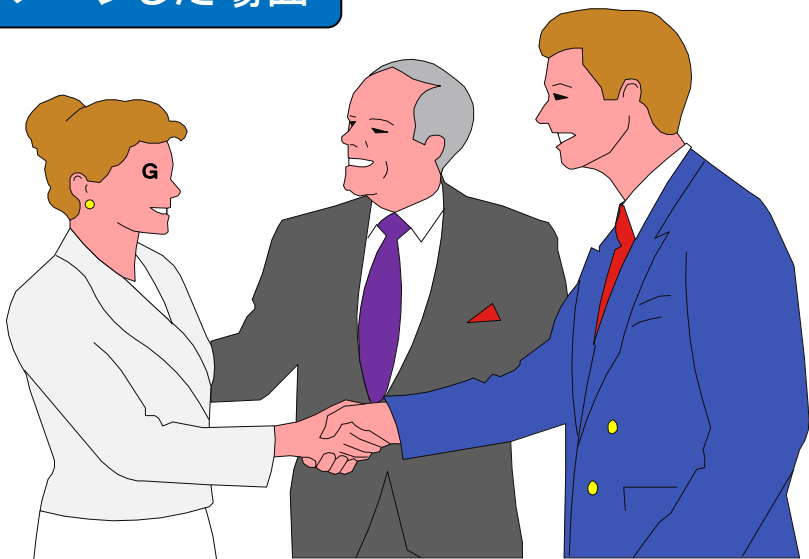
臨死体験中、脳細胞も含めてすべての細胞が完全に活動を停止している状態なら、(情報は)何も感知できないのは明らか。ただし一部でも細胞が作動していれば、そこから情報を得る。(人間は脳細胞だけで記憶、思考しているのではない。(頭の先から足の先までの)すべての神経細胞、およびその他の細胞においても、細胞が動作するという事はそこで思考がなされているのと同じ)

臨死体験中に、一つの神経細胞が動作可能状態だとしよう。するとその細胞は刺激を受け、動作(トランジェット)が起こる。隣の細胞が完全に動作停止状態であるため、不平衡状態のまま保持される。蘇生とともに刺激は隣に伝えられる。刺激が脳にまで達すると、そこで思考が起こり、人間は物語を作る。ただし、それは事実を少なからず反映するが正確ではない。下記のように実際とは異なる内容もある。(超思考、超記憶、超感覚のため)

もし完璧にすべての細胞が動作停止状態にあり、その際に起こったと事象を、“後の伝聞情報なしに”、詳細かつ正確に再現することができれば、現代生命科学の常識を超えた何らかの超作用、超感覚が存在することを認めざるを得ない。ただし、その場合であっても、それが“死後の世界”の証明にはならないことに注意。死後の世界の証明は、完全に死んだ(火葬場に送られ、墓に葬られた)後の人間の証言でなければならない。(自称霊能者は論外)

もし、身体がなくても外界の情報を得ることが可能であれば、そもそも視覚、聴覚の障害などがなぜ起こるのか？

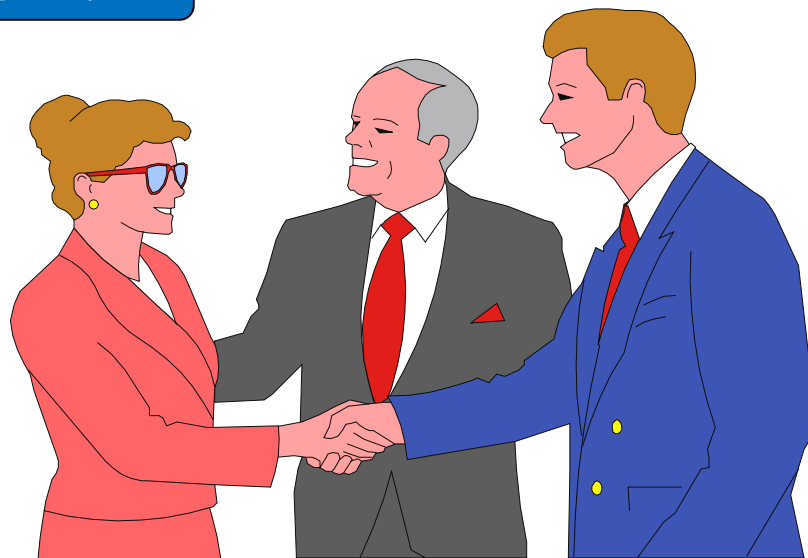
イメージした場面



実際と異なること。

女性のスーツの色は白ではなく実際はピンク。女性は眼鏡をかけていた。
真ん中の男性のネクタイは紫ではなく赤。

実際の場面



身体がなくても視覚や聴覚が存在するならば、目や耳の障害などあり得ない。